

はじめに

西川長夫

学内助成による私たちのプロジェクト研究の期間(2007年4月～2009年3月)は2008年度末で終了した。その間の私たちの研究の進行状況は研究報告1～4に記されている通りである。最初からはほぼ想定されていたことであるが、私たちは目指していた研究や調査の出発点からようやく数歩を踏み出した段階にあるのではないかと思う。研究会のメンバーが集って今後の方針を相談した結果、さしあたり学内外の助成や資金の目当てはないが、研究会自体は継続し、少なくとも研究成果を一冊の本にまとめるところまでは行こうということになった。幸い、『立命館言語文化研究』における「研究報告」の掲載は許されているので、これからも予定されている調査やインタビュー、あるいはいくつかの論考の発表は続けさせていただきたい。この二年間を振り返って、松下清雄氏の御遺族の方々や当時の学生運動、農民運動の関係者の方々をはじめ、言語文化研究所の事務局の方々もふくめて、実に多くの方々の御好意や御支援をいただいたことを強く感じている。感謝の気持ちを記させていただくとともに、今後の御指導や御協力をお願いしたいと思う。

今回の「報告書」(5)には、いいだもも氏の「ホメーロスの『イリアス』『オデュッセイ』の英雄叙事詩の一時代の後を承けて」と伊藤淳史氏の「松下清雄(渡辺武夫)関連記事―常東農民組合から茨城農民同盟へ―」を掲載させていただくことにした。いいだもも氏の論考は、松下清雄氏が亡くなったときに追悼文として松下夫人に送られたもので、すでにかかなりの年月がたってしまったが、実は私たちの「報告書」に掲載の許可をいただいてからも、あまりにも達筆な手書き原稿が私たちには解読できない部分が多く、解読のために何人かの方々のお手をわずらわすことになった。最終的には現代思潮新社の渡辺和子氏にお願いし、渡辺さんはいいだもも氏のお宅を訪れたり、幾度か筆者にお会いになって確認をとっていただいて、ようやく最終稿が本号に掲載される運びになった。この貴重な原稿の発表の機会を快く私たちに与えて下さったいいだもも氏に御礼申し上げるとともに、現代思潮新社社長という多忙な要職にありながら、この原稿のために多くの時間を割き、献身的な労苦を惜しまなかった渡辺和子氏に心から感謝の気持ちを記させていただきたい。

伊藤淳史氏の論考は、「研究報告」(2)に収められた「松下清雄(渡辺武夫)関連記事目録」に続くものであり、これも伊藤さんの多忙な日程のなかで執筆をお願いしたものである。こうしてこれまで判明でなかった歴史的事実が厳密な研究者の手で少しずつ解き明かされていくのはうれしいことだ。さらに続編をお願いしたいと思う。

「報告書」の(1)から(4)が活字化され、関係者の方々の手元にとどけられた結果、数多くの貴重な感想や証言、あるいは批判的なコメントをいただいた。私たちの今後の研究の指針となるものが多く、今後の研究に生かしたいと思う。もしお許しいただければそうした御意見や

文章のいくつかを今後の報告書に載せさせていただきたいと考えている。次回の「報告書」(6)には、とりあえず、2007年6月3日に早稲田大学の完之荘で行われた「松下清雄を語る会」の座談会（これもテープ起こしに難行して時間がたってしまったことをお詫びしたい）が掲載される予定であるが、できればこの「報告書」の内容に対する批判的な意見も載せたいと思っている。言語文化研究所の事務局の宇治橋奈名子か西川長夫あてに連絡いただければ幸いです。